The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和歌六首
Author(s)	仲田, 應弘
Citation	懐徳. 1940, 18, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

庭前種竹一旬過。早已亭亭雅趣多。夏雨送凉風掃拂。紗窓招月影婆娑。

契沖が住みたりし和泉なる伏屋氏舊邸を訪ねて

音代節雄

水清く陽の暖き和泉なるこの里にして君は學びし

秋の日のしみらにぬくし柿の實のたわゝにみのる伏屋の屋敷

庵のあと示すと主柿の實の下照る小徑藪かげに行く

池田川淙々として切崖の裾廻をめぐり秋の日ぬくし

切崖の藪下とよみ行く水を君聞きたりし庵の址かな

母

仲田應弘

昭和十五年六月十八日發病

食後の藥服まして横になる今の暑さは母にこたへむ

蒲團より伸して足よ冷たくてさすりくれよと云はぬ母かも

同じ月二十八日午後五時二十分逝く

リウマチの腫れも引きたる母の手を組ましめて從弟は有難がるも

添ひ輿の人ら勞りくれつつも輿は窪みをゆきて重たし

竹の竿長長しくて母の骨を拾はむとして音立ちにけり

母のもの整理してゐる押入に皺を伸したる紙袋あり

爽天抄

入江來布

大陸の爽天をおもふけさの秋

夕影や露滴相識る凉しさに

露のうち桔梗實とはなりにけり

桔梗のふたゝひ咲きし旦かな

稻妻や須叟の雲間に妙音天

盆の月櫻の宮の燈ろかな

秋の蚊となりつゝ草の茂りかな

霧にうく星やは海の果てしらず

霧の夜のしづかなるより秋の海